

花信



いあいさつ

古川松根は佐賀藩士古川儔綱の三男として江戸の鍋島藩邸で出生、鍋島直正公より一歳年長で、四歳の頃直正公の遊び相手に召出され、長ずるにつれ学友として側近に侍り、終生、直正公に尤も親しく仕えた近侍であります。明治三年の初冬、直正公が軽からぬ病褥に伏せられてからの数旬日は暫時もお側を離れず介護に精を盡し、病重くなられるや疾くに殉死の意を秘めていたものと思われます。

一月十八日午前二時、直正公薨去されての神葬については葬儀委員長として萬端の式次第を懇篤周到に指揮、また自ら直正公の御遺体に束帯を着けまいらせ納棺の儀をすすめ、一月二十一日午まへ、直大公が古川松根を介添人とされ御霊遷を済されるに及び、退去して獨り自室に端座し、辞世二首を詠みて、直正公の後を追ひ、純忠の誠を捧げました。

君ひとりのこしまつりて故里に、帰る心のあらばこそあらめ

今はとて急ぐや終の旅衣、たちおくるべき我身ならねば

徳川幕政の遺法に、禁殉死の事があり、その忠誠心を表てだてて顕彰することも憚られごく控えめになされました。後年、直正公の偉業を称えると共に、古川松根の忠魂に感銘する郷土人の熱意が燃上り大正二年松原神園の西方に、鍋島閑叟公の銅像とそれに控える古川松根の銅像も建立されましたが、昭和十九年惜しくも軍需品製造の為撤去のままとなり、その事情を知る人士も稀となりつつあります。

去年の春、佐賀県立博物館の発想により、適、古川松根展が開催され、直正公が大名として類稀なる教養を身につけられた根本が古川松根の当代一流の文化人としての素養にあったことを印象づけられることになりました。

惟新鴻業の政治的舞台に立つことなく、藩政の裏方として埋もれんとするその功業を、改めて江湖の人士にお傳える一助となれば望外の欣びと惟い、本図録を公刊する次第であります。よろしく御高覧をお願いいたします。

本図録編輯に当り協力いただいた佐賀県立博物館各位、とくに福井尚寿学芸員に深甚の謝意を表します。

昭和六十三年三月二十一日

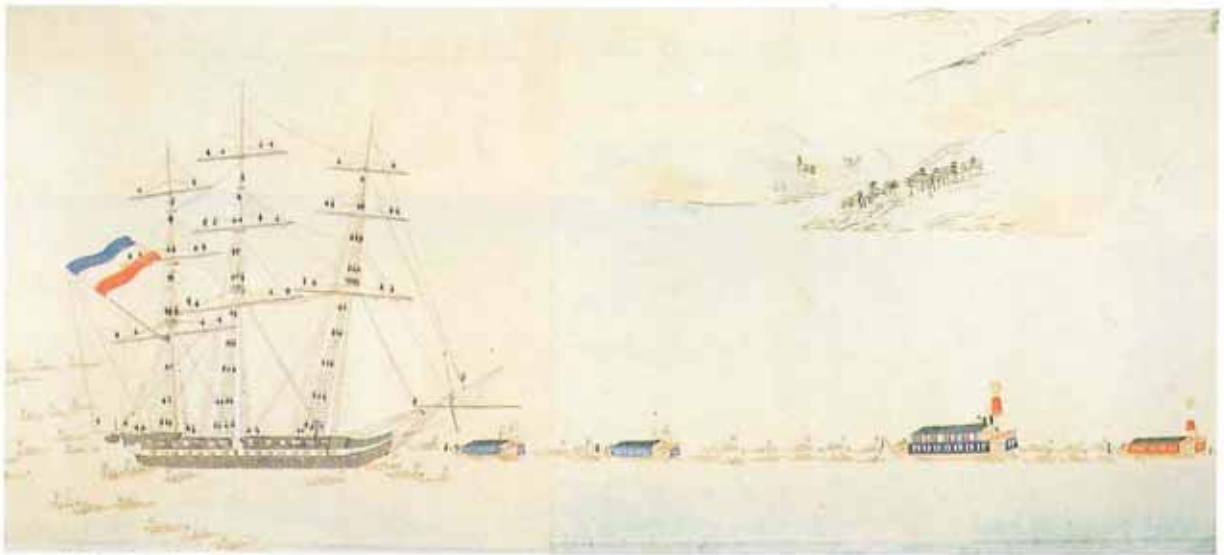
財団法人鍋島報効会

常務理事 嘉 村 三 男

目次

ごあいさつ	3
原色図版	5
総説	30
単色図版	40
図版解説	101
参考図版	119
資料	128
1 家系	128
2 上京日記	132
3 辞世・遺書・片身分け目録	145
4 古川松根純忠之碑銘	148
5 印譜	149
年譜	152
文献	158

表紙 草花図(部分、図版番号13)
裏表紙 河骨図(部分、図版番号36)



1 鍋島直正和蘭船乗り込み図（部分）鍋島報効会



1 同（部分）



1 同（部分）



10 菅原道真像 鍋島報效会

はじめに

佐賀城下八幡小路は城の北に位置する武家屋敷町で、藩政時代の面影をとどめるものも少なくなった現在も閑静な住宅地である。第一〇代藩主鍋島直正の近習で多芸多才の士として知られる古川松根は、安政元年（一八五四）頃この八幡小路に転宅しているが、後に歴史学者として名高い久米邦武（一八三九—一九三一）の住む久米家も、同じ八幡小路のすぐ近所にあった。

「古川松根純忠之碑銘」（資料4）の中で邦武は、「君聴自便之歳。

余入侍公」と記述している。

すなわち、松根が近習の任を降りた年に邦武は直正の近習になったらしく、邦武二六才、松根五二才にあたる元治元年（一八六四）の事と考えられる。邦武が近習に選ばれるに際しては、嘉永三年（一八五〇）枝吉神陽を中心として結成された尊皇派同盟、義祭同盟に邦武も加わっていたことから、御側としては危険視する意見も出たらしいが、



八幡小路の旧宅（文献21複写）

松根の「書生の勤王を唱ふるは普通の事で、其は明に本人に注意すれば宜しい、我が戒めておく、御使ひなされ」との推挙もあつて召し出されたとも伝えている（文献24）。

従つて、晩年の松根を良く知る邦武は、「純忠之碑銘」は勿論のこと『鍋島直正公伝』（文献20、以下「公伝」と略す）などで、折に触れ松根のことを言及し、特に、明治四年（一八七二）に松根が直正に殉じた際のことは、その一部始終を記録している。しかし、公務以外の松根の多芸さについては、有職故実に通じ、和歌・書画・雅楽などを嗜み、刀剣や古器の鑑識眼にすぐれていたと列記される程度で、その実情については今日具体性を欠いている。

松根は多くの才能のうち、和歌と絵画に最もすぐれ多くの作品を残している。和歌は、香川景樹に学び佐賀において小車社という結社を通して活発な活動を行なっており、絵画では、多様な画風を試みるほか、鍋島藩窯の意匠等にも係わり、さらに最初期の洋画家百武兼行に連なる人物として興味深い存在にある。本稿では、主に松根の伝記事項をたどりながら、絵画を中心にその多彩な業績を振り返ってみることにしよう。

出生・御相手

鍋島文庫（佐賀県立図書館保管）には、弘化年間藩に提出された各藩士の家系図の一部がおさめられており、幸いなことに、松根が作製



弘化元年七月二十日蘭船回倭船が来り
 岸に上りては船乗りを待たせしむるに
 此の如く一帯を賑わす事なりや
 此の如く一帯を賑わす事なりや
 ...
 此の如く一帯を賑わす事なりや
 ...

第1図

巻頭



第3図



第2図



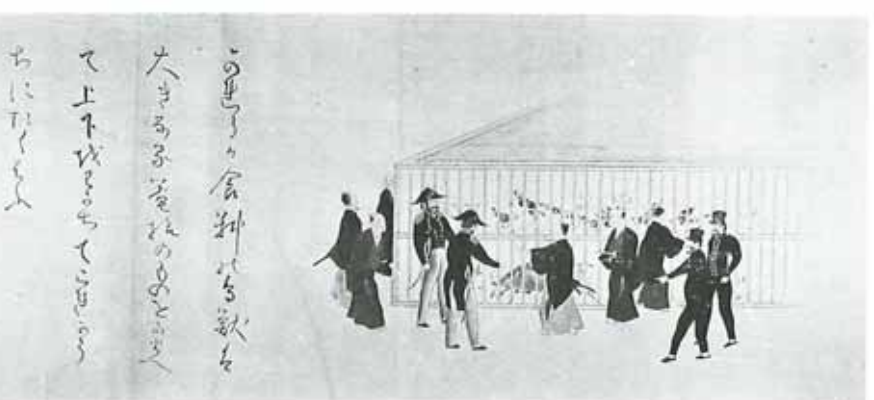
第6図



第5図



第9図



第8図

図版解説

1 鍋島直正和蘭船乗り込み図 一卷

紙本着色 三〇・〇×一三八九・五

款「古川松根」

弘化元年（一八四四）三二歳作

鍋島報效会蔵

箱書には「忠宣公使節船御乗込巻物 一軸」とある。弘化元年九月二日忠宣公こと直正は、長崎港に停泊中のオランダ使節船ハレンハレンク号に乗船し、内部を視察したが、本図巻はこれに随った松根が、その時の様子を解説文と共に克明に描いたものである。巻末奥書より、乗船からあまり時を経ずに制作したことが知られ、おそらく弘化元年中のものと考えられる。現存する松根の作品中、制作年の知られる最も古い作例であるが、描線・彩色とも流暢である。興味深いことに、長崎市立博物館にも松根による同一図巻がある。

〔巻頭〕

弘化元年七月二日阿蘭陀国使節の船長崎／＼に到着す此船かのくにの軍船にてハレンハレンと名づくるらし常の売買船にくらぶれば其形／＼はるかに大にして石火矢大小四十八挺を両段に／＼備へ船中ことに嚴重也と聞由されば／＼君かねて藩閩のしづめをうけ給はり玉ひぬれば／＼後のためかの船中を委しく見置給んと時／＼の奉行伊沢政義殿へ申乞玉ひしに聊おもふ／＼むねやあられけむとてかく御差図をそなはりし／＼かど猶再三申乞給ふに其事一／＼御ことわり

なり／＼ければ終にうべなはれぬよつて同九月廿日例の／＼売買船の出帆を見とどけ給んとて長崎に赴かせ給ひ／＼たる序にかの船中を見玉んと定給ふかくて同月／＼廿一日の早天に御屋敷より御船をいだされ両御／＼番所かつ御臺場等の御巡見かたのごとくすまさ／＼せ給ひて後かの船にいたらせ給ふやがて御船かの船に／＼ちかづくころ蘭人あまた帆綱木にのぼるこれかの船に／＼客を迎るの礼也とぞさて乗うつらせ給ふ時船中にて／＼太こをうち楽を奏す船の入口には鉄砲をもてる守衛の／＼者一人フレンチルの手前をなすこれ又かの国の礼／＼とかや船縁に使節の将官長崎在留のカピタン並に／＼副将士官の者供出迎へ奉り将官カヒタンは直に／＼御先に立て案内し奉る君けふは赤地の錦の御はか／＼まをめされ塵地の御鞆巻赤銅つくりの御太刀を／＼帶し給ふ御弓矢御打物等を御先にたてられ御手／＼鎗御小長刀を御身ちかく召具せられ御供風七十人／＼ばかり随へ給ふかつ蘭船の左右には侍数／＼十人並に鉄砲足軽数百人数艘の船／＼に乗りて警衛す

〔第2図詞書〕

さて船中の上段をめくり給ふ／＼舳のかたに音楽臺といふあり／＼これは楽器譜等をのするがために／＼まうけたり楽人あまたこれに／＼めぐりたちて喇叭やうのもの／＼のを合奏す

〔第3図詞書〕

二段め将官の座敷に入らせ／＼給ひかれらが食し奉りたる銘酒／＼菓子等をきこしめされさて／＼通詞をもつて何かの事数々／＼たづねとはせたまふ

資料

1 家系 鍋島文庫(佐賀県立図書館保管)

(イ) 古川系図 古川松根

(ロ) 系図 古川道賢

〔解説〕

「家系」は、弘化年間に藩に提出された諸家の系図で、その「フの部」の綴りの中に、松根の筆による「古川系図」と、松根の長兄で古川家の家督を継いだ道賢の書いた「系図」とが含まれている。

(イ)

源姓

古川系図 家紋梅鉢桐ノ丸

備綱 與兵衛

道賢 一介

忠吉 橋本新左衛門 為橋本家養子

與兵衛備綱三男

松根 與一初英次 実名初徳基後改松根

文化十^癸四年十月十六日於江戸桜田御屋敷出生母橋本近江守忠吉娘同十一^甲戌年

御代様御誕生翌十二^乙亥年ヨリ御内、御相手罷出候様被仰付折、罷上ル同十四^丁丑年ヨリ溜池御屋形

日勤被 仰付文政元^戊寅年十一月

御袴着御祝ニ付御目録并御酒拝領被 仰付同五

午^壬年三月三日御相手並被 仰付天保元^庚寅年二月十三日前髮取被 仰付同月廿一日

源太郎 天保十二^辛丑年正月廿日出生

右之通御座候以上

弘化三年六月 古川與一

御入部御供被 仰付同六月十九日被 召出拾人御扶持拝領被 仰付同月廿二日御側被 召成奥御小性被 仰付同二^辛卯年二月十七日

御入部^{ヲモ}首尾能被為濟候ニ付被成御祝御目録白銀五枚拝領之同五^甲午年十一月十七日山御狩

之節勢子奉行立会役被 仰付同七^丙申年十一月十九日御腰物役御小道具役兼帯被 仰付同月山

御狩之節不調法有之勢子奉行立合役被成 御免同十二月廿日御鬢役兼帯被 仰付同十一^庚子年

十二月十八日山御狩之節勢子奉行立合役被 仰付同月廿九日役方数年骨折候旨^ヲ以從御側為御

褒美御目録白銀三枚拝領之同十二^辛丑年 御參府中御子參被 遊ニ付取調子掛リ合被 仰付同

十一月四日御衣紋方被 仰付高倉前大納言永雅卿へ入門同十三^壬寅年八月六日御衣装納戸兼帯

被 仰付弘化二^乙巳年二月依願勢子奉行立合役被 差免同十一月白石山甲冑御狩之節一順分路

心遣被 仰付同十三日御道具方御道具取調子掛合被 仰付同月廿二日今度公辺^エ御系図被差出候

ニ付清書整被 仰付同三^丙午年三月七日今度於神野御茶屋御取立ニ付御家作方掛リ合被 仰付

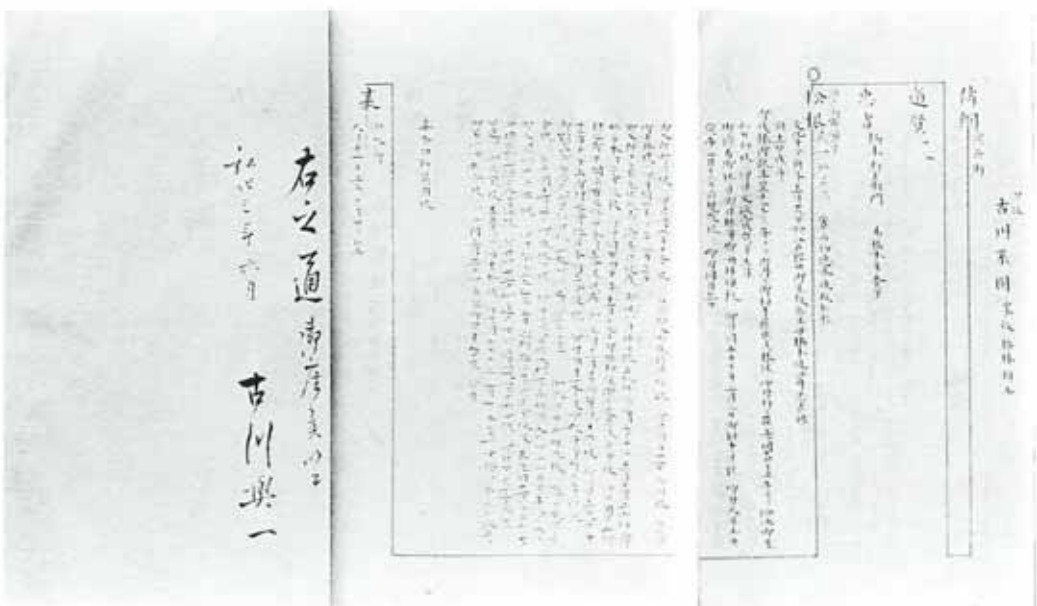
同五月十一日御隱密御用書整被 仰付妻香田新英周娘

源太郎 天保十二^辛丑年正月廿日出生

右之通御座候以上

弘化三年六月 古川與一

古川系図



5 印 譜
〔解説〕

『佐賀藩海軍史』（文献19）の著者秀島成忠（一八六五—一九四八）の画に、松根の印を押し揃えたものが二点あり、一点は『櫓園遺集』（文献21）に掲載されている。もう一点は、宝船図の帆の中に三三顆の印を押したもので、ここではその個々の印影を便宜上印文別に配列し直して原寸大で掲載する。



松根 1.



松根 2.



根松 3.



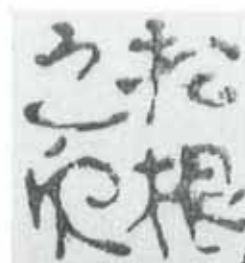
松根 4.



松根 5.



松根 6.



松根 7.
之印



根松 8.



松根 9.
之印



松根 10.
私印



古川 11.
松根



肥前国 12.
嘉人松根
古川

〔協力者・五〇音順〕

有田町歴史民俗資料館

中原江子

石井大量

中山峰吉

石戸綾子

野中萬太郎

石戸敏治

浜根義留

伊東基祐

原口静雄

伊万里市歴史民俗資料館

原田角郎

江頭英毅

東 一秀

大園 弘

広橋 勇

大園隆二郎

古川綾子

尾形善郎

古川新一

御庭焼市川家

古川文士

蒲原信一郎

古川吉重

木原 進

古川吉嗣

古賀善次郎

三好不二雄

佐賀県建設業協会

三好嘉子

佐賀県立図書館

森 醇一朗

佐嘉神社

森井貫之

庄野辰一

山浦茂彦

志波深雪

山口京治

新宮節子

山口正次

田中道雄

山口ヨシ

鶴丸時長

横尾文字

鶴丸広長

〔執筆・構成〕

福井尚寿（佐賀県立博物館学芸員）

〔表紙・扉等デザイン〕

山崎和文（佐賀県立博物館学芸員）

古川松根 ―人と作品―

昭和六三年三月三〇日発行

編集 佐賀県立博物館

〒八四〇佐賀市城内一―一五―二三

TEL（〇九五二）二四―三九四七

発行 財団法人鍋島報効会

〒八四〇佐賀市松原二―五―二二

TEL（〇九五二）二三―四二〇〇

印刷 日之出印刷株式会社

〒八四〇―一佐賀市高木瀬町長瀬

TEL（〇九五二）三一―七一七七



FURUKAWA MATSUNE.